

銃猟で捕獲した野生鳥獣をジビエに利用するための課題 Issues for Using Wildlife Captured by Gun-hunting for Gibier

成岡道男† 関亦孝二‡

NARUOKA Michio SEKIMATA Koji

1. はじめに

近年、シカやイノシシなどの増加および生息域の拡大が急速に進み、農林業への被害が深刻化している。この被害に対して、「有害鳥獣捕獲」や「個体数調整」などが進められた。それに伴って捕獲鳥獣の食肉利活用への関心が高まり、「ジビエ」として脚光を浴びている。

捕獲鳥獣のジビエ利用を進めるためには、「① 安全性の確保」、「② 肉の安定供給」、「③ 販路の確保」が課題としてあげられている¹⁾。この中で「肉の安定供給」に焦点を当てると、現状では捕獲鳥獣の多くが埋設又は焼却されており、食肉利用が全体の1割程度¹⁾でしかない。このため、「肉の安定供給」には捕獲鳥獣の食肉利用率向上が課題となっている。

シカやイノシシの捕獲は「銃猟」や「わな猟」で行われている。しかし、なぜ、これらの猟法による捕獲鳥獣の食肉利用率が低いのか。「食肉処理場が遠い」や「獲物の回収が困難」などの話を現場で聞くが、話だけでは状況を把握できず、食肉利用率の改善策の検討も困難である。このため、食肉利用率の改善の検討には、自らで捕獲を経験する必要があると考えた。

本研究では、筆者自らが巻き狩り猟に参加し、その経験をもとに、銃猟で捕獲した野生鳥獣をガイドライン²⁾に沿ってジビエに利用するための課題について考察する。

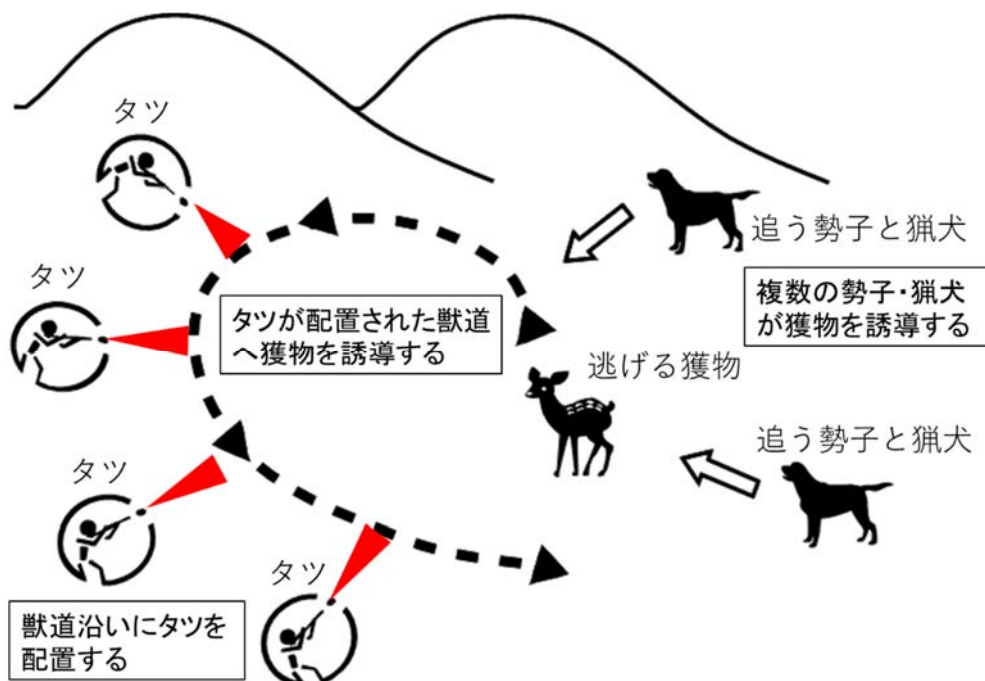


図-1 巻き狩り猟の配置

† 農研機構農村工学研究部門 Institute for Rural Engineering, NARO

‡ 一般社団法人 神奈川県狩猟協会 Kanagawa Hunting Society

キーワード：鳥獣被害対策，ジビエ，農村計画

2. 調査の概要

(1) 調査地域

調査地域は神奈川県秦野市から伊勢原市にまたがる地区であり、シカやイノシシ、ニホンザルによる農業被害が生じている。

(2) 巻き狩り猟とは

巻き狩りとは、狩猟を行う場所を囲むようにタツ（射手）を配置して、勢子が追い出した獲物を捕獲するグループ猟である（図-1）。ここで、勢子は獲物を追い出す役回りの人のことであり、タツは勢子により追い出された獲物を仕留める役回りの人のことである。獲物の追い出しには、猟犬が使われる。

(3) 狩猟グループ

筆者が所属する狩猟グループは一般社団法人神奈川県狩猟協会に所属しており、勢子が2名で猟犬が5頭、タツが14名である。各狩猟は4～10名で行った。今猟期（昨年11月15日～今年2月28日）に筆者は31回参加し、自ら2頭のシカを仕留めた。

3. 巻き狩りの流れとジビエ利用への課題

巻き狩り猟への参加経験から判明した「巻き狩り猟の流れ」（①～⑭）と「ジビエ利用への課題」（(1)～(5)）を図-2に示す。狩猟は日の出から日没までの時間帯に行われる。このため、日の出前に現地に集合し、獣道の状況を見て狩場を決め、勢子・タツの配置後に第1ラウンドの狩猟を開始する。獲物の捕獲状況や猟犬の状態により、第2ラウンドを行う。

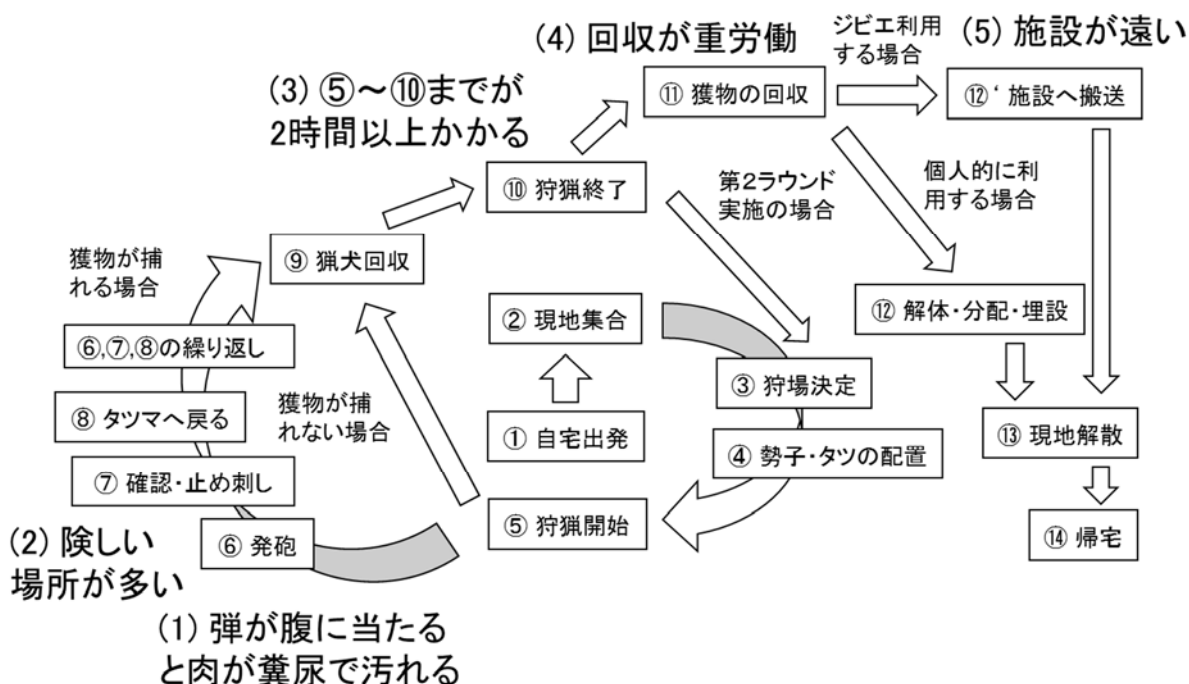


図-2 巻き狩りの流れとジビエ利用への課題

引用文献

- 1) 農林水産省：捕獲した鳥獣の食肉利活用について(2015)
- 2) 厚生労働省：野生鳥獣肉の衛生管理に関する指針（ガイドライン）(2014)